

4月11日「もう一度出会う」28：11～20

マタイ福音書が伝えるところでは、イエスの復活に立ち会った人たちは2グループありました。一つは、女性の弟子たち。彼女たちは恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去って、他の弟子たちに伝えるために走っていきました。彼女たちの話を信じた11人の弟子たちは、約束していたガリラヤの地でイエスともう一度出会うことが出来ました。

もう一つは墓を見張っていた番兵たちです。彼らは天使たちに出会うと恐れあまり死人のように固まってしまう。けれども、墓の中身がなくなってしまうとなると、任務を果たせなかったことになります。下手を打つと処刑されるかもしれません。状況としては兵士たちの方が切羽詰まっていました。走り出した彼らは、女性の弟子たちよりも早くエルサレムに着き、祭司長たちにすべてを報告しました。イエスの復活を知った祭司長たちは相談の上で、兵士たちに多額の金を与えて言いました。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んでいった』と言いなさい。」どうやらイエスの復活を金で無かったことにしようとしたのです。

「臭い物に蓋をする」という言葉がありますが、私たちは直面しがたい現実と出会ったとき、その出来事を無かったことにしてしまいたくなります。このことは私たちの社会の至るところで見られます。オリンピック・・・世界中から注目されています。経済効果も期待されますし、スポーツは感動を与えてくれますから、楽しみにしている人も多いかもしれません。東日本大震災の復興五輪と言われ、聖火リレーの出発は福島県からでした。非常に美しく整備された道を走っていましたが、一方で、整備されたのは聖火リレーが走るコース周辺だけで、その他の多くの地域は震災後のまま放置され、除染も終わっていません。放射能の汚染水は行き場を失って、海に流されようとしています。オリンピックによって、日本の社会が抱える様々な課題に蓋がされていると私は感じています。

私の敬愛する榎本てる子先生が授業でこんな経験談を語られました。彼女はカナダで牧会カウンセリングを学んでいた時に、ホスピスで実習をし

ていたそうなのですが、そこで「祈るな！」と言われたそうです。牧師が「祈るな！」と言われたのです。ホスピス、そこは死を待つ人たちの場所です。中には病による大変な痛みや苦しみを負っている方がおられます。治療の辛さ、死への恐怖、人間の力ではどうにも出来ない嘆きを訴えられ、どうしたら良いか分からなかった先生は、逃げ出したい気持ちを堪えながらいつも時間になったら「それでは祈りましょう」と言うだけ。ある日、彼女がいつものように「祈りましょう」と言うと「祈らないで！そうやって私の前から逃げないで！」と患者さんに言われたのだと。そこで、初めて「祈り」を現実からの「逃げの口上」にしていたことに気付かされたと言います。

私たちは時に、自分たちが向き合いたくない現実と出会います。そのことから逃れるために臭いものには蓋をして無かったことにしようとしま。それは信仰者であってもそうですし、祭司長たちなどユダヤ教の指導者であったにも関わらず、あろうことか金の力で神の力をなかったことにしようとしたのです。

さあ、祭司長たちの目論見はうまくいったのでしょうか・・・？当座はうまくいったように思えました。「15節 兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。」マタイが福音書を記した頃までは、その噂は優勢だったようです。しかし、2000年を経た今はどうでしょうか？イエスの復活は世界中に広まっています。

そういう意味でこの物語はとても対比的に描かれていると思えます。2つのグループはどちらも同じ情報を伝えています。到底信じがたい「死んだはずのイエスが復活した」という情報です。一方は社会的に立場も信用もある男性の兵士たちが伝えました。彼らの伝えた情報はすぐに（ある意味で）信頼され、協議の場に挙げられますが、金の力でゆがめられ、無かったことにされました。一方は信用も立場もない女性たちが伝えました。当時の家長長制度の社会では、女性には公に発言権は認められておらず、例えば裁判の場で女性が証人として立つことは出来ませんでした。弟子た

ちの中に彼女たちの発言を「**17節 疑う者もいた**」とあるのは、単に復活が信じられない出来事だからではなく、女性の発言だからというのも含まれていたかもしれません。そんな立場も弱く、信用もない女性たちが伝えた出来事の方が、却って真実とされました。確かにイエスは復活され、多くの弟子たちの前に姿を現されたのです。神は人間が覆い隠し、歪めようとする、不都合な真実をそのままにしておく方ではありません。社会の中で最も小さくされている者を通して、真実を明らかにされ、神の力を示されるのです。

今日の福音書を読みながら、思想家のカール・マルクスの言葉を思い出しました。「宗教はアヘンだ（社会の矛盾や不正義から目を背けさせる）」と語りましたが、その批判は的を得ていると思います。私たちは時折、祈りによって、何かすでに課題に向かい合ったような気にさせられ、自分自身を満足させ、それ以上の行動へと移ることが妨げられます。祈りによって相手のことを分かった気になり、それ以上踏み込んだ愛へと向かうことを妨げられます。祈りによって、他者の怒りや嘆きや悲しみといった厳しい感情を受け取ることを拒みます。けれども、キリストを信じることの本質は本当はそうであってはならないと思います。むしろ厳しい現実と向かい合い、その中に神の国を作るための原動力とならなければなりません。

先日、今、無牧の教会の礼拝の応援に行きました。そこで、啞然としました。出席が10人少しくらいだったのです。つい1年前の『祈ろう四国教区の教会』では確か30人くらいは出席があると報告されていたはずでした。理由を聞けば、高齢化による出席困難者が増えたのと、牧師の不在も相まって、この1年で一気に礼拝出席の減少が加速したのだとか。私たちの教会も、いや日本中の教会がこの課題と直面しながら、大した対応も取れずただ「祈りましょう」と目を背けて来なかったのでしょうか？いえ、教会の課題だけではありません。私たちは、周囲の人たちの課題、自分たちの社会の課題に対して、祈ったら祈りっぱなしになっていないでしょうか？

復活のイエスは弟子たちに何と言われたのでしょうか？「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」イエスは祈っていたらそれで良い、信じたらそれで終わり、とは言われませんでした。「行きなさい。」「教えた通りにしてください。」私たちに出かけて行って、そこで行動に移すようにとはっきりと告げられたのです。その時、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」必ず、私たちと一緒にいてくださると言われるのです。

讃美歌 91 「神の恵み ゆたかに受け 神の民はいさみ行く。礼拝は終わった、その実りは信じる者に授けられる。心のなかに蒔かれたその種、行動の花をひらかせる。神は招き、愛は結び、み国のために働こう！」祈りは単なる祈りではなく、次の働きのための原動力でありたいと願います。愛光保育園との共働きのキリスト教精神にはそういう意味でこんな言葉を入れました。「私たちは互いに愛し合い、隣人と共に生きる神の国を目指し、祈り、働く。」新年度、私たちは改めて、共に祈り、働く者でありたいと願います。イエス様はそんな私たちと必ず一緒にいてくださるのですから！